

人はいつだって変われるよ



人はいつだって変われるよ

職員室の机の中にそっとしまっていた児童のお母様からのお手紙たち。

私はこれまでに何度か読み返し、力をもらいました。

今でも読み返すと涙が出ます。

母の温もり

子どもは、ある時、急にやる気を失い、怠惰な方へと、乱暴な方へと傾いていくことがあります。

きっと多くの要素が化学反応を起こし、そちらの方へ引っ張られていくのでしょう。

そんな時こそ、母親の力が必要だと私はいつも思っています。

母の愛にかなうものはないのですから。

～（五年生）太郎のお母様のお手紙～

昨日はありがとうございました。

夜、太郎と話をしました。

正直なところ、学校での息子の落ち着きのない行動や、授業妨害を繰り返すことに、非常に戸惑いとても残念な気持ちで一杯でしたが、先生とお話ししたおかげで、落ち着いて太郎と向き合うことができました。

本人には、細かく追求せず、母親としての本人に対する気持ち「あなたが大事」ということを伝えました。

だから「自分を大切に」「周りを大切に」と話し、「間違っていると思うことは止める強い気持ちを持ち、自分の本来の力を良い方向に出してがんばろう」と話しました。

妹・弟が寝た後に話したのですが、途中から「抱っこしようか」というと、ためらわず私の膝にのり、涙ぐみながら私の話を聞いていました。

私がこれまで十分に甘えさせてあげられなかったのではないかと、改めて気づきました。

今のこの時期を大事にし、母親としてしっかり、じっくり寄り添っていきたいと思います。～

母の愛が、再びこの子をひとり立ちさせました。

甘えたくても甘えられない自分の立場をわか

り受け止め、けなげに生きてきたのでしょう。

母親が我が子を抱きしめ、語りかける姿は、なんと美しい光景でしょう。

私にはそう映りました。

（五年生）母の強さ「絶対に染めたらあかん！」

自然学校を真近にした教室。

すべての準備が整い、期待と不安が広がっていました。

五年生にもなると、子ども達は外見を気にし始めます。

いつも明るく振る舞っている少女、楓、白髪が目立つ子なのです。

心の葛藤を持ちながら強く生きてきたのだろう。

自然学校を真近に迎えたある日の日記に

「一週間後は、自然学校だ。楽しみだけど心配なことがあるんだ。」と記していたのです。

日記に書かれていない心配なことが気になり、楓と話しをしました。

「お風呂で髪を洗って乾かす時、白髪が光って

いやなんだ」

自然学校では、四泊五日寝食を共にします。

誰も初めての自分の姿をさらけ出すことに不安を持っているはず。

それを出し合おう、楓がその場で自分の思いが出せることを期待して。

私は心に決めました。

～数日後～

五年一組全員が多目的教室に輪になって座った。初めに自然学校に向けて楽しみにしていることを出し合った。

カレー作り、オリエンテーリング、キャンプファイヤー等々。

みんなの笑顔は頂点になった。

（よし次は勝負に出よう！）

「実は、こんな日記を書いていた友達がいるんだよ。」と楓の日記の一部を読み、「みんなはどう？みんなも自然学校で心配なことはあるの？」

急に静まりかえった。

誰も発言しない。

何分経ただろうか。私は、

「そうだね。不安なことは、受け止めてくれる



人が居ないと言えないよね。分かる。分かる。」

そうとしか言葉が出てきませんでした。

クラスの中の誰か一人でも、たった一人でも温かい視線を送れない人が居たら、成立しないのです。

と、その時、ひとりの男の子が、「ぼく、恥ずかしいんだけど、寝ている時によだれがマクラにつくことがあるんや。」と話すと、「ぼくもやで、一緒や。」とすぐさま声が上がった。

すると、何と子ども達は次々と話し始めた。「ぼくは、寝相が悪いと家の人に言われている。一回転する時もある。」

「ぼくも！」「わたしもよ！」と声。

「ぼくは、立ち上がってウロウロするらしい。みんな、踏んだらごめんな。」

笑いが起こる。

「ぼくは鼻炎で、寝ている間も鼻をかんでいる。朝起きたら、マクラの周りがティッシュだらけだけど許してな。」「いいよ。」「いいよ。」

「私は、朝、みそ汁を飲むと吐きそうになる。」

「だいじょうぶ。飲まなければいいよ。」

「私は食べるのが遅いので、みんなの時間が減ってしまうかも……。」

「いいよ。」「だいじょうぶ。」

「だいじょうぶ。」「だいじょうぶ。」この言葉がいろいろな子から発せられ、うなずきや笑顔に包まれていった。

私は、「楓がんばれ！！」と心の中で言い続けていた。

楓は下を向き、どう伝えようかと考えている様子が手に取るように分かった。

息をふうっと吐いて一度天井を見て、小さく手を挙げた。

「わたし、髪、白いやん。小さい頃からずっと



気にして、いやなこともいっぱい言われてきてん。自然学校でも、よその学校の子も居るし…」

しだいに涙声になっていった。

「だいじょうぶやで。何か言われたら、ちゃんと言い返したる。」

「だいじょうぶ。わたしらと一緒に居よう。」

「髪の毛のこと気にせんとき。楓は楓やで。」

私は、この時間をこのクラスの全員が共有できたことが何よりも嬉しく思いました。

教室にもどり、振り返りの作文を書きましたが、どの子の表情も真剣でした。

楓の作文には、今まで白髪のこととどんなつらい思いをしたかが綴られていました。

全く知らないおばさんに「髪の色おかしいね」と笑われたことや「おばあちゃん」とあだ名をつけられたこと。

悔しくて染めたいと、母親に何度も何度も泣いて訴えても「絶対に染めたらあかん、小学生や。」と聞き入れてくれず、悲しくて泣いてばかりいたこと等々。

しかし、今日みんなに相談してとてもスッキリしたこと。

相談に応じてくれている友だちの言葉を聞いているうちに、今までのことが浮かんできて涙が出てしまったこと。

そして最後にこう結んでいました。

“自然学校では、ありのままの自分でいよう”



～楓のお母様からのお手紙～

「今日の道徳の授業、良かったで！」と楓から聞きました。

お友達の悩み、自分の悩みを打ち明ける事ができ、また、それに対して皆と一緒に考えてくれて、悩んでいる人の気持ちを分かってくれた事がとても嬉しくて泣いてしまったと。

クラスみんなが、心の味方で居てくれる事が何よりも一番自分らしくいられるのだらうと思います。

自然学校大変楽しみにしています。

お母さんも楓と一緒に幾度涙を流したことでしよう。

母の強さを感じました。

(5年生) 誰のせいでもない 自分自身のせいや

退職を迎える春、十五年前の強烈な出会いを思い出します。

学級開き一日目。



笑顔で挨拶した私に「なんでお前が担任やねん。」

想定内ではあったが、心にズシンとききました。毎日起こるトラブル。

教師に対する反抗。

学級の子ども達^いが傷つくことだけは許せない。

そんな思いで彼と向き合った二年間でした。

何かあると「かかってこいや」と威嚇^{いかく}する彼。

この子の心のゆがみはどこからきているのだらうか。

何とかしてやりたくて、でもどうすることもできず、自分の力の無さに情けなくなる毎日でした。

初めの一年は、何を語りかけても、手を差し伸べても、私との距離を縮めようとせず、彼の心の内をはかることはできませんでした。

毎日叱っては、同じ言葉を繰り返していたように思います。

「人は変わるのよ。今の自分はいやでしょ。変わろう。失敗は忘れよう。良かったことだけ覚えておこうね。」

ある日から数人の友達を引き連れて遊ぶ彼の姿をよく見かけるようになりました。

「来いや。遊ぶぞ。」と放課後、声をかけるのでした。

周りの子からは、本当は遊びたくないという声を聞いてはいたが、全てが強引な彼だったのです。

小春日和の初冬、六校時、窓辺に座り背中にぼかぼかと日差しが照り、フードをかぶり昼寝をしている彼の姿がありました。

終わりの会后、クラス全員そうっと姿を消しました。実におみごと。

誰も居ない教室、彼が目目を覚ました時、何と声をかけようか、私は全く決めていませんでした。

.....

彼がひょこっと顔を上げた。と同時に「みんなは？」「帰ったよ。」

「なんで、オレ、起こしてくれへんねん。」
仁王立ちした彼に、私は静かに声をかけた。

「なぜか、分かるやろ。」すると、次の瞬間、床にポタ、ポタ、ポタ、...

彼の涙だった。



.....

彼の落とした涙の意味は何だったのだろうか。今までの自分を振り返った涙だったのだろうか。

誰も自分を待ってくれなかった悔しさ、淋しさの涙だったのだろうか。

私には、真珠の涙に見えました。

彼の素直な心が流した涙に見えました。

この時、彼は変われると確信しました。

卒業式の前日、クラスの三人の少女から、「六年二組の思い出物語」と題した小冊子をもらいました。

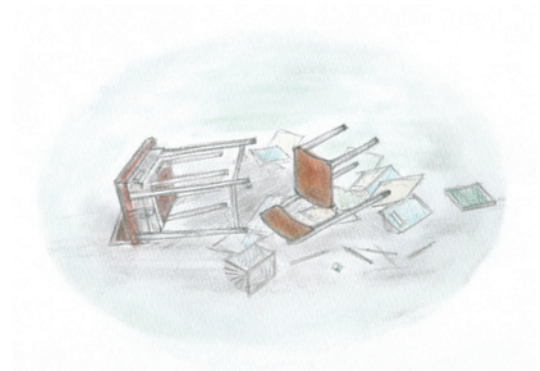
それは、絵と文で一学期からの思い出を紙芝居のように描いたものでした。

その中に、数日前の彼との出来事も記されていました。

.....

「あなたは、何も変わっていない！！」と先生が大声で叱ったことで、彼がキレた。

机やイスを倒して暴れた彼を「落ち着け！落ち



着け！」とクラスの子たちが支えていた、と。

.....

あの時、きっと彼は「変わりたい」と思っていたのでしょ。

変わろうと必死で努力していたのかもしれない。

それを、私が認めなかったことが悔しかったのだろう。

卒業式の日、親父に言われたと、近づいて伝えてくれた言葉—————

「先生の家の方へは、足を向けて寝んな」。

思わず吹き出してしまいましたが、今思えば彼

の精一杯の感謝の気持ちだったのだろうと。
—————私の宝物の言葉となりました。

成人を迎え、同窓会に招待された日。
はじける笑顔で彼は私に話しかけた。
こんな日が来るなんて……………
「先生、オレ、親父の後継いで仕事頑張るで。」
その力強い言葉が耳に残っています。



**子どもへの愛、
それは
“一人の人間として、生き抜く力をつけること”**

※文中の名前等は仮名です。

人権文化の花咲くまち 西宮をめざして 18

平成29年（2017年）3月発行
西宮市・西宮市教育委員会

文・里藤ゆかり
画・米光 智恵

人権教室とは？

人権教室は※人権擁護委員が幼稚園や小学校に出向き、園児や生徒に紙芝居などを通じて命を大切にする気持ちや思いやりの心を育み、豊かな人権感覚の醸成を図ることを目的に実施しています。

主に幼稚園、小学校の総合的な学習の時間などを利用して、大型紙芝居「ぐらぐらもりのおばけ」などを利用し、思いやりの大切さなどを伝えています。

また、保護者への講演も行っています。

※人権擁護委員とは？

地域の皆さんに人権について関心をもってもらえるような啓発活動や法務局・市役所の人権相談所において人権相談を受け、問題解決のお手伝いをするなどの活動を行っている。



法務省人権相談窓口

法務局西宮支局での人権相談 月曜から金曜の午前9時から午後4時まで
問合せ先 ☎0798-26-0061

西宮市役所での人権相談 1階市民相談課 毎月第1・3木曜日
午後1時から4時まで（受付は3時30分まで）
問合せ先 人権平和推進課
☎0798-35-3320

子どもの人権SOSミニレター 問合せ先 子どもの人権110番
☎0120-007-110・フリーダイヤル



平成29年（2017年）3月発行

編集：西宮市

〒662-8567 西宮市六湛寺町10番3号 ☎ (0798)35-3320